

腕尺関節後外側部滑膜ヒダによる投球障害の1例

○梶田 幸宏(かじた ゆきひろ)(MD), 岩堀 裕介(MD), 斉藤 豊(MD), 佐藤 啓二(MD)

愛知医科大学医学部 整形外科

【はじめに】

今回我々は高校野球投手の投球側に発生した腕尺関節後外側部滑膜ヒダ障害に対し鏡視下手術を施行し良好な結果を得られたので報告する。

【症 例】

16歳男性, 高校硬式野球投手(左投げ, 左打ち)。既往歴なし, 小学1年生から野球を始め, 現在は県内強剛高校の投手である。1年前からボールリリース時の左肘の後外側の痛みが出現し, 他院にて保存療法を施行したが疼痛が残存したため当院を紹介受診した。

腕尺関節後外側部に限局した圧痛を認め, posterior impingement test, VEO stress test が陽性で, 明らかな肘関節可動域制限や不安定性は認めなかった。局麻剤の関節内注入により痛みは完全に消失した。

単純X像, CT像では明らかな異常所見を認めず。MRIにて腕尺関節後外側に介在物の所見が疑われた。以上から腕尺関節後外側の滑膜ヒダと診断し鏡視下手術を施行した。関節鏡視下所見は, 他動で肘関節を伸展すると腕尺関節後外側の滑膜ヒダが外側腕尺関節に介在する所見が観察され, 滑膜ヒダが介在する滑車部軟骨は軟化していた。鏡視下に滑膜ヒダのデブリドマンと軟化した軟骨の蒸散を行った。術後3週から投球再開し, 3か月後に疼痛なく完全復帰した。

【考 察】

腕尺関節後外側ヒダによる投球障害は稀である。今回の症例の様に, 投球スポーツにおいて腕尺関節外側の疼痛を訴える症例において, 伸展時の肘関節後外側部の痛み, 外側腕尺関節部に限局した圧痛, 局麻剤注入による症状の消失を認めた場合には注意すべき病態である。